氏名：　熊谷　圭知　（KUMAGAI Keichi）
所属：　人間文化創成科学研究科人間科学系
学位：　社会学修士／ Master(Social Science)
職名：　教授
専門分野：　社会文化地理学　オセアニア（パプアニューギニア）地域研究
E-mail：　kumagai.keichi@ocha.ac.jp

◆研究キーワード　／　Keywords

地域／文化／開発／ジェンダー／パプアニューギニア
Region ／ Culture ／ Development ／ Gender ／ Papua New Guinea

◆主要業績　　総数（３）件

【著書】
・Kumagai, Keichi et al eds.(2008) Beyond the Difference: Repositioning Gender and Development in Asian and the Pacific Context, (Proceedings of International Workshop for Junior Scholars), Ochanomizu University, Tokyo, 243p.
【論文】
・熊谷圭知（2008）「ジェンダーと開発における男性の位置・再考」、戒能民江編『国家／ファミリーの再構築――人権・私的領域・政策』（ジェンダー研究のフロンティア１）作品社、pp.207-229.
・熊谷圭知（2008）「差異を越えて――ローカル・センシティヴな開発とジェンダーの行方」、Ｆ－ＧＥＮＳジャーナル第 10 号 ,pp.34-40.

◆研究内容　／　Research Pursuits

1. ローカル・センシティヴな「開発とジェンダー」研究の構築
21 世紀 COE「ジェンダー研究のフロンティア」の研究プロジェクトと熊谷が代表者となる科研費の双方の活動を並行して行ない、次の成果を得た。
1）英文プロシーディングスの刊行（2008 年 3 月）
2007 年 1 月に実施した国際シンポジウムのプロシーディングスに掲載する若手研究者の論文を査読・編集し、刊行した。
2）シンポジウム・学会発表（主なもの）
① 10 月 13 － 14 日　コメント（国際開発学会「社会開発とジェンダー研究部会」、お茶の水女子大学 COE プログラム共催、「開発とジェンダー」シンポジウム）（国立民族学博物館）
② 10 月 20 日「差異を越えて――ローカル・センシティヴな開発とジェンダーの行方」（「ジェンダー研究のフロンティア」全体シンポジウム（お茶の水女子大学）
③ 11 月 17 日「ローカル・センシティヴな『ジェンダーと開発』はジェンダー・センシティヴか？」人文地理学会大会（関西学院大学）

2. フィールドワーク
① 6 月 16 日～ 23 日　パプアニューギニア、首都特別州、総選挙の選挙活動取材
③ 7 月 28 日～ 8 月 18 日　パプアニューギニア、東セピック州ほか、開発と住民行動

◆教育内容　／　Educational Pursuits

学部：フィールドワーク方法論、地域研究方法論、オセアニア社会文化論Ⅱ、人間と空間などを担当した。内容については、2007 年度のシラバスを参照していただきたい。授業は、講義と演習（学生の報告）を組み合わせた形で行ない、学生に多数の文献を読み、考えてもらうよう工夫した。このほか、2007 年度は教室外の実習も積極的に行なった。地域研究実習Ⅰでは、「多文化共生の街づくりとその課題」と題し、NGO からの聞き取り、大久保の街歩きを行なった。人間と空間の授業でも、学生を引率してお茶大周辺を歩き、台地と谷・坂が複雑に入り組んだ地形と江戸・東京の都市計画の跡をたどり、景観を味わった。

◆研究計画

（1）ローカル・センシティヴな「開発とジェンダー」研究
科研費研究会は、本年度で最終年度を迎える。今年度は、JICA や NGO など開発実務に携わる人々との共同研究会を開催することを予定しているほか、最終報告書の作成に向けた活動を行なう。この活動の成果は、さらに、単行本等の形で、一般社会に還元するとともに、開発実践に携わる人々にも貢献するものとしたい。英文プロシーディングスの刊行によって、海外の研究者とのネットワークも構築できると期待している。

（2）パプアニューギニアの開発と住民行動
これまで 20 年来続けてきた東セピック州の村落調査を、自然科学系の研究者と共同調査の形で行ない、資源と人口の均衡の問題、水環境の問題などを総合的に考察することを計画している。

◆メッセージ

グローバル化の中で、私たちの地理的想像力と他者を思いやる力は、むしろ貧困化しているように思えます。地域研究を旨とする地理学の目的は、地域に生きる人々の現実と構造を記述し、共感をともなう理解を作り出すことにあると考えます。

私がパプアニューギニアと付き合い始めて、もう 29 年になります。都市移住者の掘立小屋集落や、奥地の村をフィールドワークしながら、人々との付き合いを重ねるうちに、地域研究と開発実践の二つの領域を往還するようになりました。第三世界を対象とする調査研究には、冷静な頭脳と熱い心、理解と共感の双方が必要です。西欧中心的な概念や理論に基づいて、研究対象を他者として捉え、分析するだけでは、先進国が途上国を支配する力が強まるだけで、相互の距離や格差は縮まらないでしょう。お互いの間に横たわる差異をきちんと見据えた上で、そこにとどまらない相互作用や協働の可能性を探ろうとする、そんな学生を育てたいと思います。